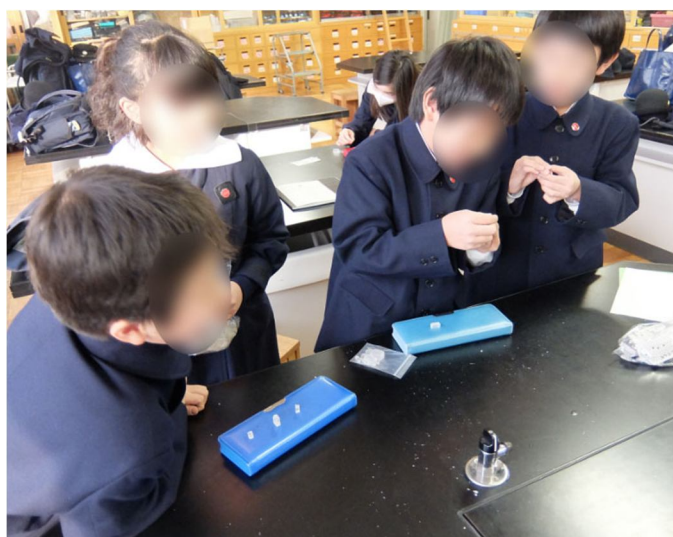


「岩塩の教材性(4)」

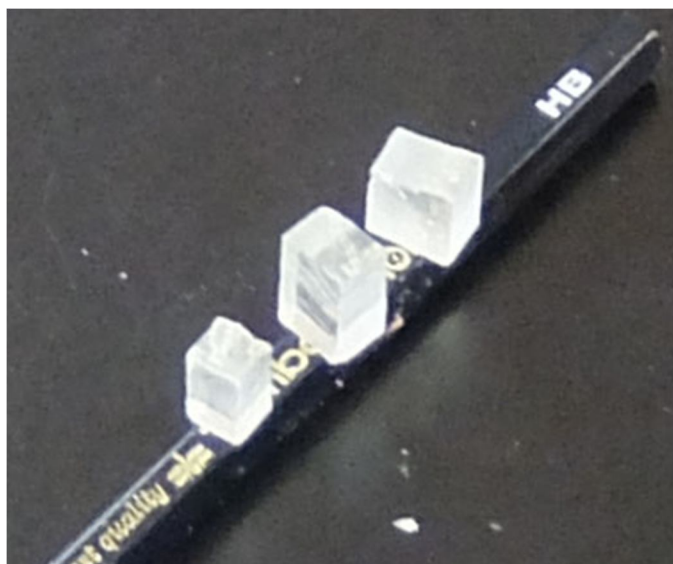
お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

今回は、帰国児童学級の子どもたち(4年~6年)の異学年での活動となった。各自1個ずつの岩塩の塊から、へき開標本を割り出した。わずか40分間だったが、なかなか楽しい活動だった。

活動の最後に、できあがったへき開標本を互いに「鑑賞」し合うことにした。私はこうした活動を、「見学会」でも「鑑賞会」でもなく、「博覧会」と呼んでいる。今回のものは「岩塩博覧会」---略して「塩博」ということになる。河原でひろった石なら「石博」、社会の町探検なら「町博」となる。



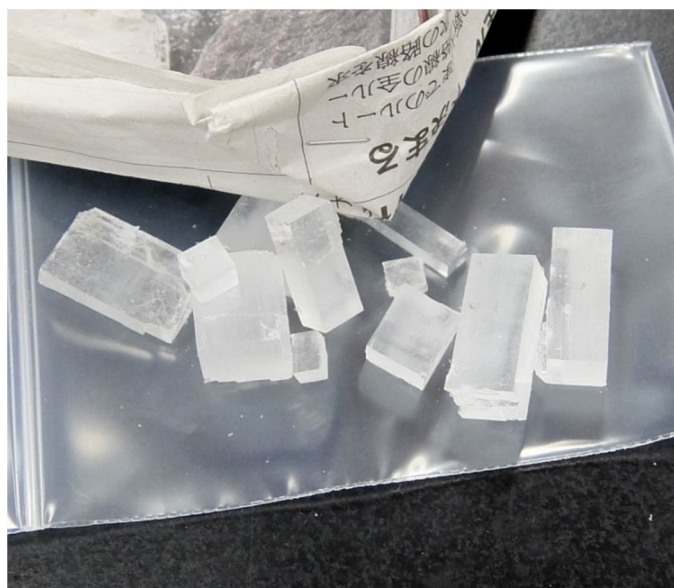
子どもたちは学年を越えて、互いの「作品」を見合っていた。透明感、いかに立方体に近いか、それに大きさに関心があったようだ。



展示の方法にも、いろいろ工夫が見られた。岩塩そのものの美しさだけでなく、飾り方という点で、自由な造形要素も感じられた。



最後に、記録カードにふり返りを書き、チャック付きの厚手のポリ袋に大切に入れた。1人7~8個の、美しいへき開標本を持ち帰ることができた。



【子どものふり返りから】

「私は岩塩をはじめてさわりました。最初は少しきれいな石?と思いましたが、クギで割ると、ふしぎなぐらいきれいな、たいらな面が出て、おどろきました。またやってみたいです。」(5年女児)

「ぼくは、〇〇(国名)の学校で、1回も実けんをしたことがなかったので、今日の実けんはたのしかったです。石はもともとすきだったので、むちゅうで実けんしました。」(4年男児)

短時間の単発的な活動だったが、科学に興味を持たせるには、なかなか良い題材かも知れない。